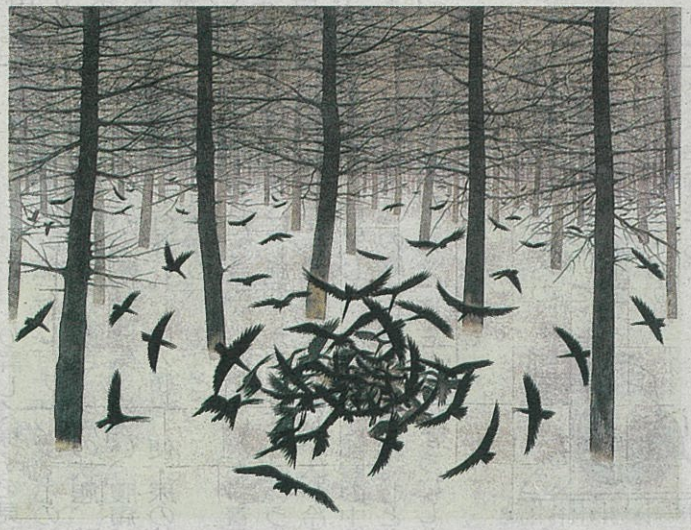
文化・芸術



「凍林」

1960年、紙本彩色
113・0㌢×146・3㌢

加山又造（1927～2004年）

〈名画の扉〉

大川美術館特集展示から

雪の積もった曇天の林。その暗く冷たい景色は奥深くどこまでも広がっています。

中央には渦を巻くように群がるカラスたち。何羽かはくちばしを開いており、鳴き声が羽音とともに聞こえてきそうです。丸裸になった木々の間を飛ぶカラスの大小と濃淡により遠近が表現されています。また、もみ紙の手法も用いられ、そのテクスチャーにより冬の乾ききった空気、ひび割れた雪の大地が表現されています。

西陣衣装図案家の父、四條円山派絵師の祖父をもち京都に生まれた加山は、戦後の厳しい時代において、伝統に依拠しながらも同時代の芸術となり得る新しい感覚の日本画を描き続けました。

現在、展示室5で、本作をはじめとして、冬の季節にふさわしい作品を精選した特集展示「冬をテーマに―風・雪・空」を行っています。

（池田）